

奥州藤原氏の繁栄と気候変動 Prosperity of Oshu Fujiwara clan and climatic change

芹沢 浩^{1*}

SERIZAWA, Hiroshi^{1*}

¹ 芹沢浩, ² 雨宮隆, ³ 伊藤公紀

¹Hiroshi Serizawa, ²Takashi Amemiya, ³Kiminori Itoh

昨年、世界文化遺産に登録された平泉は奥州藤原氏繁栄の地である。ここでは後3年の役が終結して清衡が清原家唯一の生残者として奥州支配の基礎を築いた1087年から源頼朝によって藤原氏が滅ぼされた1189年までを奥州藤原氏繁栄の時代としておくと、この平安時代後期から鎌倉時代にかけての約100年は地球規模で気温が上昇した中世温暖期としても知られている[1]。従来、奥州藤原氏の繁栄は東北地方に産出した多量の金によるというのが定説であり、それは確かだと思われる。しかし、金以外にも大鷲の尾羽やアザラシの皮などの北方特産物が京に献上され、前者は矢羽として、後者は馬具として平安貴族の間で珍重されたという記録もある。また、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、清衡が「私には樺太やシベリアの民も付き従っている」と豪語したという記述もあり、遠く樺太やシベリアにまで至る交易路の存在もうかがえる[2]。実際、アムール川流域のナデジンスコエ遺跡から出土した断面がZ型の鉄の矢じりと同じ形のものが北海道の厚真町からも出土しているという事実もあり、この時期におけるシベリアとの文化交流の可能性は強く示唆される。一方で、江戸時代にシベリアに渡った大黒屋光太夫(1751-1828)や間宮林蔵(1780-1844)等の日本人記録によれば、当時の樺太、シベリアの気候は非常に寒冷であったことが推測される。そして、この時期はマウンダー極小期からドルトン極小期に至る地球規模での寒冷期、小氷期とも重なる[3],[4],[5]。逆に歴史を下れば、比較的温暖だった縄文時代の三内丸山遺跡におけるシベリア文化流入の痕跡なども指摘することができる。こうした状況を踏まえ、本発表では「地球の温暖期に、断続的に樺太を経由して北日本とシベリアとの間の交易路が形成され、大陸文化の流入が繰り返された」という日本文化史と気候変動を関連付ける新たな仮説を提示したい。

[1] Kobashi, T., Kawamura, K., Severinghaus, J.P., Barnola, J.-M., Nakaegawa, T., Vinther, B.M., Johnsen, S.J., Box, J.E. (2011). High variability of Greenland surface temperature over the past 4000 years estimated from trapped air in an ice core. *Geophysical Research Letters* 38:L21501.

[2] 五味文彦, 本郷和人, 西田友広 (2008~). 現代語訳 吾妻鏡. 吉川弘文館.

[3] 吉村昭 (2003). 大黒屋光太夫 (上下). 毎日新聞社.

[4] 山下恒夫 (2004). 大黒屋光太夫 帝政ロシア漂流の物語. 岩波新書.

[5] 吉村昭 (1987). 間宮林蔵. 講談社文庫.

キーワード: 江戸時代の小氷期, 奥州藤原氏, シベリアからの文化流入, 大黒屋光太夫, 中世温暖期, 間宮林蔵

Keywords: Little Ice Age in Edo period, Oshu Fujiwara clan, Inflow of Siberian culture, Daikokuya Kodayu, Medieval Warm Period, Mamiya Rinzou